出精製し，臓器中の螢光阻止物質を分離除去する必要がある。Sephadex LH-20 を使用する分離方法を開発し，定量した結果では，注入 MC は局所より極めて速かに代謝され，他の臓器に分配される MC は無視される程の微量であることが判明した(高橋)。

3 今日の話題「慢性肺化膿症」

a. 非特異的慢性肺感染症殊に慢性肺炎

(京都大学結核胸部疾患研究所　内科学第二)　宮　城　征　四　郎

結核，真菌，寄生虫を除く非特異的な慢性に経過する肺感染症に対して，我が国では，その確たる起炎菌の決定がなされぬ儘に，所謂〝肺化膿症〟なる名で総括されて片附けられる傾向にある。我々は所謂〝非特異的慢性肺感染症〟180例の調査結果を基にして次の如き結論を得，これを報告した。

①非特異的慢性肺感染症の裡，空洞を形成して来ない例が増加している。

②空洞形成群は非形成群に比して経過が長く，化学療法に終始した場合，薄壁空洞の残存や瘢痕形成或いは pyofibrosis を残す例が少くない。

③空洞非形成群は化学療法のみで4～6週の経過で痕かたなく陰影の消失を見る。

④これらの事実のみからしても，非特異的慢性肺感染症を〝肺化膿症〟と称して総括することは適当でなく，この裡，空洞形成群を肺膿瘍，空洞非形成群を慢性肺炎と呼びたい。

b. 外科からみた最近の肺化膿症

(国立療養所日野荘　医務課長)　小　林　君　美

戦後すぐれた抗生物質や化学療法剤の登場により感染性疾患の定型的な症候が大巾にゆがめられつつあることは周知である。

肺化膿症もまたその例外ではない。ことに，外科で取扱われる肺化膿症例では，すでに急性症状が消褪しているか，あるいは発病当初から著明な症状がなく，X線所見からみても肺腫瘍とまぎらわしいものが少なくない。外科からみた問題点もここにあるわけである。

本シンポジウムで我々は，最近6カ年間に経験した75例の肺化膿症例についての検討結果から，最近の症例中には，開胸所見によりはじめて肺癌と鑑別しうるものが少なくないことを明らかにした。また，近年では，手術成績も成功例90数%で，きわめて良好である。

以上の結果から，我々は，肺化膿症と肺癌との鑑別診断が困難な症例では，積極的に開胸して診断を確定し，必要に応じて積極的に切除することが大切であると考えている。

c. それぞれの特徴をもった非特異性慢性肺化膿症の3例

(京都大学結核胸部疾患研究所　内科学第一)　中　井　　準

いろいろの点で興味のあった慢性肺感染症の3例を報告した。

第1例は，結核病巣がほとんど安定した後に該部に肺膿瘍を生じ，喀痰及び気管支分泌物よりの起炎菌の分離が極めて困難で，また，いろいろの薬物療法も無効で，遂に左肺全剔除の止むなきに至った症例である。剔除肺病巣から Aspergillus fumigatus が発見されたが，組織

所見からは Aspergillus は二次的感染と考えられた。

第2例は，悪寒，高熱をもって発病，胸部レントゲン写真上，ニボーを有する透亮像を認めた典型的肺膿瘍の症例で，化学療法により良好な経過をとったが，レ線上透亮が消失し瘢痕を残すまでに約6ケ月を要した。

第3例は，肺結核の治療中，他の肺野に腫瘤状の陰影を生じ，悪性腫瘍に対する検査の成績はすべて陰性であったが，増大する傾向を認めたことと年令とより，肺癌を疑って切除した症例である。切除組織所見は肺膿瘍であった。

d. 慢性肺炎の病理組織像

（京都大学結核胸部疾患研究所　病理部）　森　川　茂

いわゆる非特異性慢性肺炎の病理組織像に就いて，1965—1967年の京大医学部病理学教室剖検例及び1966—1967年同病理組織検査室のプローベ標本により検索した。慢性に経過する肺の炎症として，結核その他の特殊性炎を除くと，1）小葉性肺炎の化膿性変化あるいは肉芽性変化，2）大葉性肺炎の異常経過として肺膿瘍，肺壊疽・肉様変，3）原発性の肺壊疽・肺膿瘍，4）肺真菌症，5）慢性間質性肺炎，更に特異的なものとして1例の，6）原発性の結節性肉芽形成をみる肺炎像をみた。

慢性小葉性肺炎の肉芽型には肺胞構造の破壊されたびまん性の肉芽形成と肺胞構造は保たれ間質や肺胞腔内へ肉芽組織の突出がみられる型と2型あり，前者はしばしば microabscess を合併していた。慢性間質性肺炎の病理組織像はやはり肺胞隔壁がよく残り繊維化した肉芽組織が隔壁に増生し，粗い格子状の印象を与える。一部肺胞内には剥離した上皮や遊出した白血球，赤血球をみた。異常 γ-グロブリン血症の一例に原発性と思われを肺の肉芽性炎をみた。この肉芽組織は間質及び肺胞内にもみられ，リンパ球，形質細胞，好酸球の他種々の形の巨細胞も認められた。螢光抗体法により，円形単核細胞や巨細胞胞体内に γ-グロブリンを証明した。最後に瘢痕癌とその類似の所見について討論した。

4　心臓外科の現況と問題点

（三重県立大学医学部　胸部外科）　久　保　克　行

心臓外科の現況については，長石教授門下生が赴任している諸施設において行なわれた心臓手術の症例について述べた。昭和42年9月までに行なわれた症例数は1183例で先天性心疾患802例，後天性心疾患381例である。

そのうち，低体温法または人工心肺による直視下心臓内手術は先天性心疾患586例，後天性心疾患62例である。

これらの手術成績をみると，手術成績の悪い疾患は，大約次の数種の疾患に集中している。すなわち，肺高血圧症を伴なった心室中隔欠損症，フアロー氏四徴症，心内膜床欠損症，および乳幼児心疾患などである。そこでまず，これらの疾患に対する外科治療に関して検討を加えた。

また，血流遮断の方法に関しての問題点として人工心肺の簡易化，および拍動型人工心の開発の二点について述べた。

人工心肺の簡易化についての要点は，その清掃，消毒などの準備や後仕末が簡単であること，および多量のヘパリン血を準備しなくて実施しうることの二点である。そのために，人工肺および回路セットをすべて disposable となし，症例毎に新らしい既に消毒された人工肺および回路セットを用いれば，その準備は約10分間で完了し，しかも使用後に放棄すればよいの